美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要
1989, Vol. 34,24～30

小・中学生の音楽行動について（Ⅰ）

杉　山　知　子

Ⅰ　はじめに

小・中学生を対象とした音楽行動及び音楽文化に関する調査研究は「小学生の音楽環境」――質問紙調査の分析を通して[1]，を始めとする法岡淑子氏の一連の研究[2]により実像への接近がなされている。

それらによると，中学生の時期は，学校外音楽を好きとする「聴取中心友だち志向型」の音楽行動タイプの者と，学校音楽，学校外音楽の両方を好きとする「表現中心家族志向型[3]」の音楽行動タイプの者に大きく分けられる。さらに，前者は生徒文化であり，後者は学校文化を担うものである。学校文化を担う，学校音楽，学校以外の音楽の両方を好きとする者は学校社会への適応がうまくできている状態を示す。また，生徒文化としての学校外音楽は，成長の過程で生ずる様々な課題解決の機能や仲間集団への帰属性の機能を担っている。従って，音楽は生徒文化との間に接点を見出す可能性を最も多くもつ教科と考えられ，それゆえ中学校の音楽教育の課題の大きさを指摘するものである。

ところで，小学校１年生より大学生に至るまで，多くの人が述べた「教わる側の発信[4]」には音楽に関する様々な視点からの意見がのせられている。

その内容は，音楽が好きか嫌いかということに始まり，教科書のこと，授業のこと，テストのこと，教師のことなどであり，子どもたちの生の声が聞こえてくる。このような生の声は，教育を受ける側の実像を的確に把握するために貴重な存在となる。

しかし，ともすれば音楽に対して好意的な態度をとる人の意見が大きく打ち出される可能性がある。

そこで，音楽に対して好意的な人も，また，そうでない人も，すべての声を拾う必要があるのではないだろうか。

以上のような観点から，本稿は小・中学生の音楽行動に関して質問紙調査を行い，考察を加える。

Ⅱ　調査対象者及び調査内容・方法

本研究において調査対象とした小・中学生は，岡山県北部に位置する人口約１万５千人のM町の児童・生徒たちである。

M町は一部に温泉街など観光地や商業地域を控えているが，全般的には田園地帯であり兼業農家の占める割合が多い。しかし，近隣に人口８万人の市があり，文化水準は中程度と考えられる。

調査人数は表１の通りである。

表１　調査対象人数

	男子	女子	計
小学校５年生	26人	32人	58人
６年生	41	33	74
小学校１年生	85	100	185
２年生	111	95	206
３年生	104	95	199
計	367	355	722

なお小学生は1986年，中学生は1988年に調査を行っており，中学校１・２年生の対象者の中には２年前にも小学校５・６年生で調査対象となった者が含まれている。

調査内容に関しては1986年と1988年において同一の

ものである。それらは，日常の音楽行動に関するもの，授業で望む活動，など21項目にわたる次のようなものである。

1．学校外で歌をうたうことがありますか。
2．学校外で何かの楽器を演奏することがありますか。
3．家の人と一緒に楽器を弾いたり，歌をうたったりすることがありますか。
4．友だちと音楽の話をすることがありますか。
5．家の人と音楽の話をすることがありますか。
6．音楽会にでかけることがありますか。
7．レコードや音楽テープ，CDをきくことがありますか。
8．自分の好きなレコードや音楽テープ，CDを買ったことがありますか。
9．友達とレコードや音楽テープの貸しかりをすることがありますか。
10．ラジオやテレビの音楽番組を聞いたり見たりすることがありますか。
11．音楽のことがのっている雑誌や本を読むことがありますか。
12．自分で作詞をしたり作曲をしたりして音楽を作ったことがありますか。
13．学校の教科のなかでの位置付け
14．「学校の音楽」と「学校外の音楽」について
15．授業で歌をうたうことについて
16．授業で楽器を演奏することについて
17．授業で音楽を作る，作曲することについて
18．授業中，レコードなどで音楽を聞くことについて
19．授業で楽譜や音符の勉強をすることについて
20．学校以外で音楽を習ったことがありますか。
21．自分の音楽の成績はどれぐらいだと思いますか。

また回答は，次のように選択肢より1つ選ぶものとした。

項目	選　択　肢
1〜12	イ．よくある　ロ．ときどきある　ハ．ほとんどない
13	小学生の場合 国語・算数・理科・社会 体育・図工・音楽・家庭　より好きな3教科を選択 中学生の場合 国語・数学・理科・社会・英語 保体・美術・音楽・技術家庭　より好きな3科目を選択
14	イ．両方好き　ロ．学校で習う音楽が好き ハ．学校以外の音楽が好　ニ．両方嫌い
15〜19	イ．やりたい　ロ．どちらともいえない　ハ．やりたくない
20	イ．現在習っている　ロ．過去に習ったことがある ハ．習ったことがない。
21	イ．たいへんよい　ロ．まあよい　ハ．ふつう ニ．少し悪い　ホ．たいへん悪い

まず，1986年に実施した小学生の音楽行動について考察を加える。

Ⅲ　小学生の音楽行動

小学校5・6年生の音楽行動については表2の結果を得た。

表2　小学校5・6年生の音楽行動　　人（%）

項目	よくある	ときどきある	ほとんどない	計
1	17 (13.2)	47 (36.4)	65 (50.4)	129 (100.0)
2	21 (16.2)	60 (46.2)	49 (37.7)	130 (100.0)
3	8 (6.1)	25 (19.1)	98 (74.8)	131 (100.0)
4	17 (12.9)	51 (38.6)	64 (48.5)	132 (100.0)
5	17 (12.9)	46 (34.8)	69 (52.3)	132 (100.0)
6	3 (2.3)	22 (16.9)	105 (80.8)	130 (100.0)
7	38 (28.8)	70 (53.0)	24 (18.2)	132 (100.0)
8	18 (13.6)	40 (30.3)	74 (56.1)	132 (100.0)
9	2 (1.5)	10 (7.6)	120 (90.9)	132 (100.0)
10	51 (39.2)	44 (33.8)	35 (26.9)	130 (100.0)
11	23 (17.4)	28 (21.2)	81 (61.4)	132 (100.0)
12	9 (6.9)	17 (13.0)	105 (80.2)	131 (100.0)

日常生活における子どもの音楽行動は，テレビ，ラジオの音楽番組視聴とレコードや音楽テープなどの聴

取が最も多い。一方，歌をうたったり，楽器の演奏など表現行動はあまり行われず，聴取中心の音楽行動といえる。しかし，聴取行動を通して家族や友だちと交流するというところにまでは至っていない。つまり，能動的な聴取行動というよりはむしろ，個人内での受動的な娯楽中心の聴取の仕方といえる。

このように聴取行動中心の子どもたちであるが，男子に比べ，女子では表現行動も比較的活発に行われている。これは，表3に示すように女子の場合，学校外で音楽を習っている児童が多く，そのほとんどがピアノ・電子オルガンなど演奏に関するものであることと関係あると思われる。

表3　学校外で音楽を習った経験　　人（%）

	男子	女子	計
イ 現在習っている	3(4.5)	28(43.1)	31
ロ 過去に習ったことがある	8(11.9)	11(16.9)	19
ハ 習ったことがない	56(83.6)	26(40.0)	82
計	67(100.0)	65(100.0)	132

次に，音楽の授業に対する意識については，質問項目13から21（20は除く）のように，小学校の8教科（国算理社図体音家）における音楽の位置付け，学校の音楽と学校以外の音楽，授業で望む活動，自分の成績について，という面より調査した。

8教科の中で，音楽を好きな科目に入れている児童は，男子13名（19.4%）女子37名（56.9%），であり，女子には好まれる科目といえる。さらに女子の望む活動は「授業で楽器を演奏したい」（64.6%），「音楽を聴きたい」（70.8%），ということであり，「歌をうたう」「音楽を作る」「楽譜や音符の勉強」は「どちらともいえない」「やりたくない」が多く，積極的には望まない活動といえる。

一方，男子の場合，好きな科目に音楽を入れている児童は19.4%と少数である。しかし，「音楽を聴きたい」（38.8%），「楽器演奏をしたい」（25.4%），というように「歌うこと」「音楽を作ること」「楽譜や音符の勉強」に比べ多くの児童が聴く活動や楽器演奏をやりたいと答えている。

このように，音楽の学習活動の中では「聴く」ことと「楽器の演奏」が男女ともに望まれる活動といえる。

次に質問項目14の回答結果は表4に示す通りである。

男子は5・6年の差が大きく，5年生は「学校の音楽が好き」（29.2%），「学校以外の音楽が好き」（33.3%），というように学校音楽と学校以外の音楽の支持が同じくらいある。一方6年生は「学校の音楽が好き」（12.2%），「学校以外の音楽が好き」（41.5%）となっており学校外音楽の支持が強い。

表4　「学校の音楽」「学校以外の音楽」について　人（%）

	5年男子	5年女子	6年男子	6年女子
両方好き	3(12.5)	17(53.1)	3(7.3)	16(50.0)
学校の音楽が好き	7(29.2)	4(12.5)	5(12.2)	4(12.5)
学校以外の音楽が好き	8(33.3)	11(34.4)	17(41.5)	8(25.0)
両方嫌い	6(25.0)	0	16(39.0)	4(12.5)
	24(100.0)	32(100.0)	41(100.0)	32(100.0)

しかし，この傾向は直ちに学校音楽から学校外音楽への志向の変化を意味するものではない。なぜなら，音楽に対する態度そのものに学年間の差が認められるからである。

つまり，5年男子においては「両方嫌い」とする児童が6名（25%），6年男子では16名（39%）という数値に示されるように，5年男子に比べ6年男子は音楽に対して，より遠いところに位置すると考えらろるからである。

女子の場合は学年間の差はみられず，学校の音楽も学校外の音楽も「両方好き」（50.8%），「学校以外の音楽が好き」（29.2%），「学校の音楽が好き」（12.3%），「両方嫌い」（6.2%），というように音楽に対する志向は非常に強い。

このように，女子は学校の音楽，学校以外の音楽に関わらず音楽に対して強い志向を示す。これに比べ，男子は，学年間の差はあるが，女子ほどには強い音楽志向を示さない。このような，男女間の音楽志向の差は日常の音楽行動においてもいえることであり，調査項目の1から12のほとんどにおいて男女の有意差がみられる。

次に音楽の成績についての自己評価は表5の通りである。

表5　成績の自己評価　　人（%）

	5年男子	5年女子	6年男子	6年女子
イ たいへんよい	1(3.8)	3(9.4)	1(2.4)	0
ロ まあよい	1(3.8)	7(21.9)	6(14.6)	8(24.2)
ハ ふつう	15(57.7)	19(59.4)	20(48.8)	21(63.6)
ニ 少し悪い	6(23.1)	3(9.4)	8(19.5)	3(9.1)
ホ たいへん悪い	3(11.5)	0	6(14.6)	1(3.0)
計	26(100.0)	32(100.0)	41(100.0)	33(100.0)

6年男子は，音楽志向の少ない割には成績に対して自信をもっており，また5年女子も自己評価は可成り良い。これらは各学年，男女の特色の1つと思われる。

次に，1988年に調査した中学生の音楽行動について考察する。

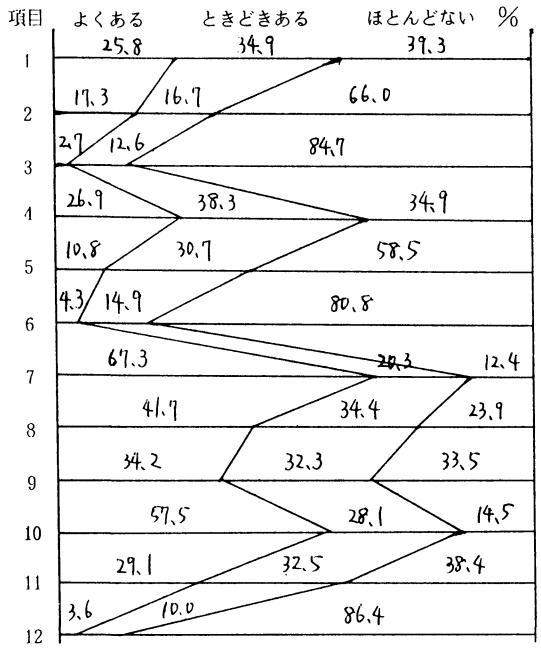
なお1986年，1988年の2回とも調査対象となった生徒については音楽行動の変容にも論及したい。

Ⅳ　中学生の音楽行動及び小学生から中学生への行動の変容

中学生590名全体の音楽行動は図1の通りである。

図1を質問項目全体にわたって，表2（小学校5・6年生の音楽行動）に比べると「よくある」の増加と「ほとんどない」の減少がみられる。つまり，音楽行動が全般的に積極化することを示す。中でも，音楽テープなどの聴取行動と音楽テープなどの購入や貸し借りに著しい増加がみられる。（7・8・9）

図1　中学生の音楽行動



テレビ・ラジオによる音楽番組の視聴も増加しているが，音楽テープなどの視聴の増加の方が顕著である。

このように，中学生においては音楽を友だちとの交流手段にした行動が多くなっており，これは小学生の場合にはあまりみられない現象である。

このことは子どもの成長に関係深く，自己の目ざめといわれる思春期における自己表現，あるいは，友だちとの連帯感に音楽が介在することを表わすものと考えられる。小学生と中学生のこれらの差は単なる集団の差ではなく，成長による変化と考えられる。それは同一対象者の2回の調査結果を比較することにより明らかにされる。

表6は1986年，1988年の2回の調査結果の比較において，有意差のある項目を抜き出したものである。

項目は「友だちと音楽の話をする」「音楽テープなどを聴く」「音楽テープなどを買う」「友だちと音楽テープなどの貸し借りをする」というように，友だちや社会との交流に関している。さらに，これらのどの項目においても中学1年生，あるいは中学2年生というように，後の方に「よくある」の数値が増加している。このことはやはり，先に述べたように，子どもの成長が音楽行動の変容の一要因になっていることを裏付けるものである。

行動の変化についてみると，5年生から中学1年生のグループよりも，6年生から中学2年生のグループの方が差が大きい。これは，調査時期が7月であるため，1年生は中学生としての日が浅く，経験が少ないことに起因すると考えられる。

変化の仕方については，まず，友だちと音楽テープなどの貸し借りを行うようになり，次に音楽テープなどの購入，という順序性を踏んでいる。この順序は当然考えられるものである。

ところで，中学1・2年生において1986年と1988年

表6　2回の調査結果の比較　　（人）

		5年生			中学1年生			6年生			中学2年生		
		5男	中1男	x^2	5女	中1女	x^2	6男	中2男	x^2	6女	中2女	x^2
4 友だちと音楽の話をする	イ	1	3		5	8		6	7		5	11	
	ロ	4	10	※	19	14		13	18		15	16	
	ハ	21	12		8	10		22	17		13	5	
7 音楽テープなどをきく	イ	4	10		8	19		9	24		17	27	
	ロ	17	11		23	9	※※	18	12	※※	12	7	※
	ハ	5	4		1	4		14	6		4	0	
8 好きな音楽テープなどを買う	イ	3	5		4	11		5	16		6	17	
	ロ	8	9		13	11		8	14	※※	11	12	※※※
	ハ	15	10		15	10		28	12		16	3	
9 友だちとテープなどを貸し借りする	イ	0	3		0	3		1	12		1	15	
	ロ	0	7	※※	3	15	※※※	3	11	※※※	4	10	※※※
	ハ	26	15		29	14		37	18		28	7	

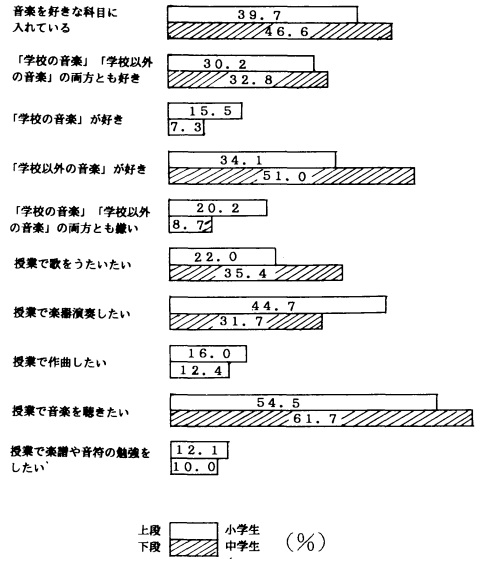
イ．よくある　　※※※　P<0.001
ロ．ときどきある　　※※　P<0.005
ハ．ほとんどない　　※　P<0.05

の2回の調査対象者と，1988年1回の調査対象者の音楽行動の比較を行った。

その結果，1・2年生とも有意な差はみられなかった。従って，表6における小学校5年生と中学1年生，小学校6年生と中学2年生の間の有意な差はそのままこの地域における小・中学生の行動の差，また成長の過程における差とみなすことができる。

学校の音楽に対する意識については次の結果が得られた。

図2　小・中学生の比較



まず，音楽が好きな科目であるかどうかについて，「好き」と回答した生徒は46.6%である。また「学校の音楽」「学校以外の音楽」などの選択では「両方好き」(32.8%)，「学校音楽が好き」(7.3%)，「学校以外の音楽が好き」(51.0%)，「両方嫌い」(8.7%) となっている。

授業において「やりたい」のは「レコードなどで音楽を聴く」(61.7%)，「歌をうたう」(35.4%)，「楽器の演奏」(31.7%) であり，これらの活動は比較的望まれる。

以上，意識に関する回答を小学生との比較で表わすと図2のようになる。

小学生に比べ，中学生では音楽がより多くの生徒に好まれる科目となり，また「学校以外の音楽」が好きという生徒が増加している。

「楽器演奏をしたい」は減少するが「歌をうたいたい」は増加し，「音楽を聴きたい」もやや増加している。このように，中学生は小学生より音楽に対して，より好意的な態度であり，より積極的といえる。

以上は中学生の総体的な傾向であるが，男女差，学年差もみられる。

男女間の差は相当大きく，質問のすべての項目において有意な差がみられた。

図3は日常の音楽行動，及び，授業において「よくある」「やりたい」の回答者を男女別に表わしている。

このように，音楽行動，授業に対する意識の両面において，男子に比べ女子の方が積極的といえる。

次に，学年差についてみる。

学年間で差のみられる項目は次の通りである。

4．友達と音楽の話をすることがありますか。

7．レコードや音楽テープ，CDをきくことがありますか。

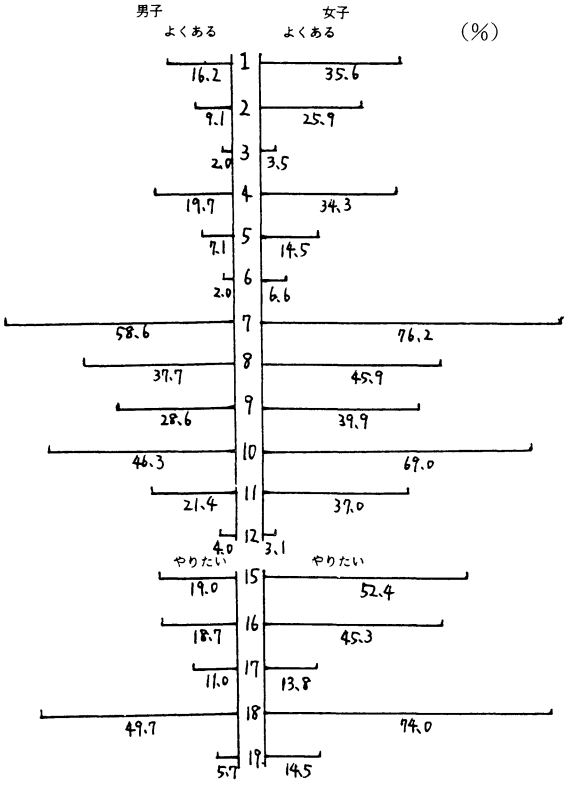
8．自分の好きなレコードや音楽テープ，CDを買ったことがありますか。

9．友達とレコードや音楽テープの貸し借りをする

ことがありますか。

10. ラジオやテレビの音楽番組を聞いたり見たりすることがありますか。
11. 音楽のことがのっている雑誌や本を読むことがありますか。
13. 学校の教科のなかでの音楽の位置付け。
14. 「学校の音楽」と「学校以外の音楽」について。
15. 授業で歌をうたうことについて。
16. 授業で楽器を演奏することについて。
19. 授業で楽譜や音符の勉強をすることについて。
21. 自分の音楽の成績はどれくらいだと思いますか。

図3　男女別の音楽行動



この中で，4・7・8・9・10・11については上級生になるに従い行動の積極化がみられる。

これらの項目は社会的な行動の部類に属するものであり，成長に伴なう変化と考えられる。

一方，13・14・15・16・19・21の項目は，意識の面であり成長との関連というよりはむしろ，学年の特色を表わすものと考えられる。

13では，音楽を好きとする生徒は1年生66.7%，2年生31.2%，3年生43.8%であり，2年生は他学年に比べ音楽を好まない。

また，授業に対する意識（15・16・19）では1年と3年の有意差はなく，「やりたい」とする生徒が比較的多い。しかし2年生は1年，3年の両学年とも有意差があり，「やりたい」とする生徒は少ない。

このように，2年生は音楽に対して他学年より遠くに位置するといえる。

さらに21においては，全学年の半数近くが「ふつう」と答え，正規分布の形を成すが，2年生では「たいへんよい」「たいへん悪い」という両極の生徒が他学年より多く，自己評価のバラつきが大きい。

また，音楽の授業を好きとすることと授業に対する意識の関係において，1年生は「好き」とする生徒が多い（66.7%）割には「やりたい」という生徒が少ない（約40%）。逆に3年生は「好き」な生徒が43.8%と1年生に比べて少数であるが「やりたい」という生徒は約38%であり，1年生とほぼ同率である。

このことは，1年生と3年生では，3年生の方が「音楽の授業が好き」ということと「やりたい」ということが，より密接に結びついていることを示すものと考えられる。

以上のように，学年差には成長の過程における順次的な差と，学年の個性といえる特色上の差がみられる。

V　まとめ

音楽文化というものは地域性との関連を離れては存在できない。

そこで本稿は岡山県北部M町の児童・生徒の音楽行動を調査，分析し，実像への接近を試みた。

分析の観点は，小学生及び中学生の全般的な音楽行動の傾向と，成長による行動の変容，さらに，男子・女子における行動の差，について等である。

まず全体的にみると，小・中学生ともに聴取行動が多い。しかも，テレビ・ラジオによる音楽番組の聴取がその大部分を占めており，個人的な娯楽性が強い。

しかし，中学生では音楽テープなどの聴取が急増し，それはテレビ・ラジオによる音楽聴取行動よりも多くなる。

この傾向は，小・中学校における同一対象者の回答の変化においても同様である。

また中学生では，友だちとの音楽テープなどの貸し借り，及びそれらの購入という社会的な行動も増加している。このことより，音楽テープの聴取とそれの貸し借りなどは相乗的に増加すると考えられる。

これはすなわち，音楽テープを媒体とした友だちとの交流の増加を意味し，小学生の個人的な聴取行動に対し，中学生は友だちとの交流的な聴取行動といえる。

次に，音楽行動における男女差については，小・中学生とも調査の全項目に有意差がみられた。

音楽行動においては女子が男子よりも積極的である。

それは，学校の音楽，学校以外の音楽を問わず，音楽の好きな生徒が男子より女子の方に多いことと関連する。

また，「学校の音楽」「学校以外の音楽」において，男子は「学校以外の音楽が好き」という生徒が多いのに対し，女子は「両方好き」「学校以外の音楽が好き」という生徒がどちらもほぼ半数を占めていた。

＜注および引用文献＞

1）法岡淑子　小学生の音楽環境，音楽教育学第13号，1983年，PP.26～37

2）前掲1）を始め，音楽教育学において，「中学生の音楽行動」「青年期の音楽文化」が発表されている。

3）法岡淑子　中学生の音楽行動，音楽教育学第14号，1984年，P84

4）教わる側の発信，音楽教育研究№51，1987年，PP 2 ～126

＜付記＞

本研究においてご協力いただきました宮地功先生，並びに対象校の皆様に厚く感謝申し上げます。